
鍛冶屋と捨て子と占い師～黒薔薇神父退魔戦記 序～

灰谷爽治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍛冶屋と捨て子と占い師〜黒薔薇神父退魔戦記 序〜

【Nコード】

N3388I

【作者名】

灰谷爽冶

【あらすじ】

この世界には魔物がいる。

人を誑かし陥れ、あるいは獲物として付け狙う、文字通りの魔の眷属たち。

奴らを倒せるのは、薔薇と宝玉と十文字の聖護符の加護を得たハンターだけ。

ユークロニア（どこでもない時代）を舞台とした、ちよいエロ・ちよいグロ、後味痛快アクションファンタジー。

・10・02・07：連載長期化により、小説タイトルを『黒薔薇

神父退魔戦記』から『鍛冶屋と捨て子と占い師』黒薔薇神父退魔戦記 序』に変更しました。只今全編改稿につき更新停止中。

序（前書き）

物語に出て来る地名・団体・宗教等はすべて架空の存在であり、実在するものとは一切関係ありません。

序

神はこの世に、天と地を創られた。

世界には天と、地と、そのはざまが生まれた。

神は天と地とそのはざまに、命あるものを創られた。

命ある全てのものには、男の側と、女の側が与えられた。

男であること、女であることは、生み、増え、育み、満ちるための奇跡であった。

男の側と女の側は、番い、産み、殖え、育み、満ちた。

神の住む樂園にはその頃、人の男と女がいた。

無垢なる人は天使に守られ、神のいとし子として愛されていた。

天と地とそのはざまに、命あるものが満ちるころ。

人の男と女は、天使に叡智を授けられた。

神の知恵を得た人は神の使いとなり、御心に従い地に降りた。
人の男と女もまた、番い、産み、殖え、育み、満ちた。

地に満ちた人は、いつしか叡智の尊さを忘れた。

天にそむくことを覚え、天にそむく喜びを知った。

人はみずからの思いのままに奪い、犯し、殺した。

人がはじめに天を降りるとき、共に天を去った天使がいた。
楽園で人を見守り続けた、白銀の翼を持つ天使だった。

天使は神の御前に、みずからの翼を置いていった。
地に降りた天使は人に姿を変え、常に男と女の傍らに在った。
神のいとし子を守り、慈しみ、愛した。

時が経ち、人が地に満ちても、天使は人を見守った。
天使は善き人も悪しき人も、分け隔てることがなかった。
誰をも同じように、守り、慈しみ、愛した。

悪の誘惑と魅力が人を惑わし、多くの人が悪しき道を歩く頃。
天使は、人のために死んだ。

人に奪われ、人に犯され、人に殺された。
天からは白銀に光る羽が舞い落ち、天使の骸は光と闇に溶けて消えた。

神は天使の死と人の裏切りに、深く深く悲しまれた。
神の嘆きに地は震え、天は大粒の雫を降らせた。

天は神の御心そのままに、悲しみに涙を流し続けた。
涙の雨は海となり、怒れる地を宥め、人とともに彼の罪を飲み込んでなお、止む事無く振り続けた。

地は神の御心そのままに、怒りに自らを震わせ、その身を千々に砕いて海に沈んだ。

天使を殺した人もまた、地と共に神の悲しみに飲まれ、海の底に眠った。

七日の後、天の涙は枯れ、大地のほとんどは海に覆われた。
島となった地には、ほんのわずかの命あるものと、善き人だけが残っていた。

神は人を知った。

人とは我がいとし子にして、罪深き命であると。
賢く、惑いやすく、善き者にも、悪しき者にもなる。

神はしかし思った。

人とは罪深き命にしてかつ、悔い改めることのできる我がいとし子であると。

善き人が悪に染まることもあれば、悪しき人が善の心を取り戻すこともあると。

神は誓いを立てられた。

悪しき人が善を施すとき、彼に樂園を約束することを。
善き人が迷うとき、いとし子を地につかわし、悪しきものから守ることを。

幾千の昼の果て、幾千の夜の彼方。

今神の子は地に降り、悪に惑わされる人をお救いになっている。
善を忘れた人に、神の教えを説いている。

翼無き天使の如く、天におわす神の如く。

神の子・メシアの心は、地の全てを覆うだろう。
善は生まれ、増やされ、育まれ、人のあいだに満ちるだろう。

惑う人よ、神の子を求める人よ。

染まるなかれ。
略奪と、侵犯と、殺戮に。

嘆く人よ、天の救いを求める人よ。

忘るなかれ。

愛と、赦しと、慈しみを。

（聖典序章 創世と予言）

メシア正教はこの世界でもっとも古く、また最も人々の間に浸透している宗教とされている。

領主がメシア正教徒である街には、街の東西南北及び中心部に、十文字を描くように教会が建てられている。

教会のある場所を結んでできる聖護符で、街が悪しきものから守られると信じられているのである。

建立された教会はどれも豪華かつ荘厳であり、それぞれに違った趣きもあるため、国外の敬虔な信者が巡礼に訪れることも少なくない。どの教会にも共通しているものは、紅薔薇と宝玉と十文字の聖護符、そして十三聖人（一人の天使と十二人の聖者）のステンドグラスである。

1・守護者ガブリエル。

原初の男と女を案じ、その守護のために楽園から墮天した天使。

2・預言者ジョアン。

神の言葉を聞き神の子に名をつけた、メシアの最初の弟子。

3・伝道師ファロス。

真実の愛を説き大陸を巡る、心優しき伝道師。

4・戦士カイン。

命を賭けてメシアを守った、勇敢な聖戦士。

5・人狼口メオ。

月夜に人狼と化す、気高き半人半獣の始祖。

6・無垢の子リネット。

誰よりも純粋な心と無垢な魂を持つ、メシアの養女。

7・占者クロノス。

予知能力を持ち、メシアの死を予言した占い師。

8・娼婦ソフィア。

街の孤児を養うために春をひさぎ続けた、美しき娼婦。

9・異人ナスル。

遙か異国よりメシアに会いに来た、敬虔なる僕。

10・盲女ルネ。

全てを見通す目を持ちながらも、決して瞼を開かぬ花売りの女。

11・富者サバト。

自らの財を人々の救済のために投げ打った、懐深き富める男。

12・野駆けの子トーマ。

神の子の到来を人々に告げる、大地と風に愛された俊足の少年。

13・不死身の血吸いシリウス。

汚辱と苦痛に苛まれ続ける神の子に死を与えた、不老不死の吸血鬼。

メシア正教のシンボルは宝玉と薔薇を纏った十文字の聖護符だが、これはメシアの最期の姿に由来する。

咲き誇る深紅の薔薇は、地に流れた清きメシアの血を。

玉虫色に淡く輝く宝玉は、人の罪を赦したもうた、メシアの高潔な魂を。

繊細で柔和な装飾の施された十文字は、陵辱と拷問の果てに身罷られた、尊きメシアの御身を。

神の子・メシアの姿が描かれなくなったのは、新暦221年以降。

『遅すぎた敬意』と呼ばれる宣言により、メシアの姿を描くことが固く禁じられたためだ。

両手を大地に繋がれ辱められたメシアの、十文字を描くように横たわった遺体。

腹部から流れ出した血に、赤く染まる床。

裏切りと汚辱、苦痛に苛まれたメシアの、最期に浮かべた恍惚の笑

み。

以前はこの姿をそのまま聖護符としていたが、これでは死後もメシアを辱めることになるとの見解を、教会本部が示した。

時の司教長フィオナ5世は、真実の敬意をメシアに払うため、聖護符の変更を宣言する。

新暦221年6月30日。

奇しくもメシアが天に召された日のことである。

フィオナ5世はこの宣言を『遅すぎた敬意』と呼び、以降メシア正教の聖護符は紅薔薇と宝玉、そして十文字が取って代わることとなった。

教典たる『聖典』から離れてメシアの死に触れることは、神の子を侮辱することに等しい。

信仰心があるのであれば、決してメシアの遺骸を描いてはならない。

この掟は新暦1753年の現在においても、固く遵守されている。

1・出会い

よう、あんたここらじゃ見ない顔だな。

もしかして、今日が初めてか？

ダメだぜ、シンジンさんがこんなところ、こんな時間に一人でうろついてたらよ。

知ってっただろ？

闇あ俺らの世界じゃねんだ。

どんな魔物に魅入られつか、わかんねえぞ。

……ああ？

魔物だなんて大袈裟だあ？

何言っただ、こないだだってその八百屋のダンナの浮気相手がサキュバスだったってんで……ははあ、さてはあんた『サイエンス・ジュニア』か？

あれだろ、魔物だ何だなんてな、『信仰上のメタファーにすぎない』ってやつだろ？

『この世は物質の世界である。』

不確定で不可視のものは、すなわち無意味に等しい。

神も悪魔も、精霊も魔物も、全ては信仰上のメタファーにすぎない。我らは叡智を持って生まれた科学の申し子。サイエンス・ジュニア

幻想から解放された我らこそ、知性を持つ真の存在である。』

…だっけ？

ほら、こないだあんたらが出した声明だよ。
増えてんだよな、あんたみたいに、この世に魔物なんざ実在しねえ
って言うヤツ。

だから俺ら『薔薇十字』だって、最近じゃ何かと肩身が狭……………は
ああ？

なっ、あんた薔薇十字知らねってか？

サイエンス・ジュニアも？

ってか魔物ってどういうことだって！？

……。

本っ当に何も知らねんだな。

あんた、一体どこから来たんだ？ …… あ、ヤパ……………？

何だそりゃ。

はー……ま、いいけどよ。

どんな事情が知らねえけど、とにかくしばらくはここにいんだろ？

じゃ、最低限この位は知つといたほうがいいぜ。

この街で一番恐ろしいのは、人間なんかじゃない。

ヤバいことに人間が手え出すときはな、この辺じゃ大体、『魔物』
が絡んでんだ。

魔物を退治できんのは、メシア正教の祝福を受けた『ハンター』だ
け。

何だっけ…すげー長い正式名称があんだよな。
誰も使ってねっけど。

―ガスっ！

「って！ 何すんだよ！」

「なに、こんなとこでナンパ？」

「っな、バツ力違いよ！」

「こんばんわ、ここは初めて？」

「おい、邪魔すんじゃない！」

てかお前こそ何してんだよ、こんなとこガラじゃねえだろが
とつとと帰れよ、家でカミさん待ってんだろ？」

「フン 私だつて、とつとと帰れるもんなら帰りたいさ」

「ははあ、また仕事つてわけか
で、何なんだ今度は？」

「言えないってわかってて聞いているでしょ、それ」

「へへ…ま、お前もうまいことやれよ
俺の折角の金ヅルなんだからよ」

「よく言う、ぐうたら酒飲みのくせに
じゃあねお嬢さん、ヘンなのにつかつたらダメだよ」

「うるせっ！ とつと失せるカマ神父！」

「ははは…」

「つたく……へへ、悪い。」

「ヘンな邪魔あ入っちゃったな。」

「え？ アイツ？」

「なんつーか……ま、クサレ縁だね。」

「もしかして、嬢ちゃん気になるわけ？」

「キレイな顔してたって、あ？」

「やめといた方がいいと思うぜ。」

「アイツあヘンタイだし既婚者だし、その上ヨメさん意外になんて興味ナシだからな。」

「人当たりはいいけど、他の女なんざカボチャみたいにしかなんてねつぞ。」

「ああ？」

「この街のハンターはアイツか、って？」

ハハ、アハハハハ！

バカ言うなよ、あんな優男がハンターなんてなれるわけねえじゃねーか！

あの細腕で魔物退治？

無理だろそりゃ絶対！

ワハ、アハハハハハハ！！

ハハ、アハハ…… ったく、ジョークの上手え嬢ちゃんだな。

あーあ、んなムクれんなよ。

折角の可愛い顔が台無しだぜ？

な、飲み物もう一杯、どうだ？

いいから、俺のオゴリな。

なあ…… あんた、名前は何てんだ？

やあ、今こうして喋ってて思ったんだよな。

何か、初めて会って気がしねえな、って。

違えよ、下心なんか無えって。

そっとうんじゃなくて……… んあ？

いつ頃のことだった？

えつとだな…… 今から、7、8年くらい前。

へへえ、何だよ、俺に興味持ってくれたってわけ？

まーまーまー！

そう照れんなつて。

ご期待通り、俺サマの昔話してやつから。

お前さんに良く似たヤツに出会った頃は、色々あつてな。
酒のサカナにするには丁度いいかも知れねえわ。

そのかわり、結構長くなるぜ？

こつ見えて俺あオシャベリさんだかな。
飽きたら早いとこ教えてくれよ。

ギョーラってババアの質屋に行った時が、今からして思えば始まり
だったんだよな。

その頃俺、ちよつと荒れててな。
ろくに働きもしねえで、毎日食うもんも食わずに飲んだくれてたんだな。

あの日は、質に入れた首飾りを返してもらいに行った。

酒屋の支払いがかさんじまってよ、仕方なくジイさんの形見の、月光石と白金の首飾り入れたってわけ。

それが……ギョーラってのがまたこつつくババアだよ。
思い出しても腹立つぜえ。

あのババ、俺んちの家宝がたった48キラにしかなんねえつつうんだ！

ま、嘘ついてんのは分かってたけどな。

しおしおでケツの穴みたいな顔したババアのくせにアイツ、価値のある宝飾品に目が無えんだ。

月光石も白金も本物使ってたから、材料だけだつて200キライこの辺の物価で言うなら、ひと家族の生活費二月分くらいーにはなるはずなんだぜ。

それを『大したもんじゃないんだ、そんだけの金出してもらえただけでもありがたいと思いな！』ときた。

ざけんなよ。

はした金でクソババに家宝盗られてたまるかってんだ。
だろ？

ところがそんな時は他に方法もなくてよ。

腸煮えくり返ってたけど、仕方なく言い値で預けたわけ。

それからもうハツチャキンなつて働いたね。

期限は二週間。

それ以上になると、『買い手がついた』なんて嘔吐いて、ババアが自分のモンにしちまうからな。

ま、俺サマあ泣く子も黙る『薔薇十字』だし？

本業で稼ごうと思えば、48キライなんざあつつー間よ。

あそうそう、『薔薇十字』について話してなかったよな。

あれあな、俺ら鍛冶職人の中でもトックベツなヤツだけがもらえる

称号なんだ。

『ハンターの右腕』とも呼ばれてっけど……もしかして想像ついたんじゃない？

そ。

俺らが作るのはハンターのための武器。

魔物共に人間相手の武器なんざ、通用しねえかな。

ハンターひとりひとりのためだけのオーダーメイドを請け負うのが、メシアの血（薔薇）と肉（十文字）の紋章を掲げることを許された俺たち、っつーわけよ。

だから俺らは通称『薔薇十字』。

お分かり？

で、話戻すけど……俺はちょっぴつとまとまった金作って、一週間後にまた店に行ったわけ。

利子分も合わせて全額払っちゃって、とつと親父の形見取り戻したかったからな。

そしたらさ、なーんかちまっこいガキがババアとやり合ってたわけ。

あのギョーラ相手にだぜ？

確かに、長年質屋やってるだけあって、あのババ見る目だけあるんだわ。

でも強欲だしすぐに人の足元見やがるし、交渉粘ればネバる程値段下げるんだな。

そいつ相手に噛みつくなんざ、なんつーアホさらしてんだと思ったね。

でも…良く見たらそのガキ、どうも喋れないみたいなんだ。
それに多分、金にも結構困ってたんだろな。
身振り手振り込みで、少しでも高値で売ろうとして必死なわけ。

ほら、俺優しいだろ？

それ見てたらさ、どうにもカワイソになってきちまって。

「…ダメダメ、こんなもんになんか値打ち、あると思うかい」

「……」

「いい加減におしよ
確かに輸入もんだけどね、あんたが言うほどの値段になんてなりや
しないよ」

「……、……！」

「ああそう、まだ言うかい
そんなに高値で売りたいなら他所に行きな！
あんたは知らないだろうけどね、アタシ以上に良心的な値段つける
店なんざ、ここらのどこ探したって見つかりやしな…」

「おーい！ ババアいるかババアー！！」

わざとデカイ声出して、俺は呼んでやった。
結構手え焼いてたみたいだし、気をそらすつもりなら丁度いいだろ。

「……ッ！ うるっさいよこの飲んだくれ！！
あんたの首飾りなんざもう売れっちまったよ！」

「嘔吐けよババア、二週間までは売りに出さないのが約束だろ」

「仕方ないだろ、どうしてもって人がいたんだから
言い値でいいから売ってくれて言われちゃ、アタシだって心が揺
らぐさ」

「ふーん……
相つ変わらず、信用の置けねえ店だなここあ
俺ん家の家宝まで……」

「ヘッ、お生憎様
縁がなかったと思って、諦めるんだね」

「……しゃあねえ
じゃ、その新しい持ち主に教えといてくれや
あれあ元々、鍛冶屋のゴアン家のもんだから、扱いには十分気をつ
けてくれってな」

「心配するこたないね
あんたなんかよりも、次の持ち主さんの方がよっぽど大事にしてく
れるさ」

「いいや、ただのコレクションと同じような扱いじゃダメなんだ
……… なんだって、火の精霊との契約があっかな」

「……… どういう意味だい？」

「どういう意味も何も、そのまんまさ
鍛冶屋の家の家宝だぜ？」

あんまり勝手なことすつと、火の精霊が怒って持ち主が消し炭な
つちま……」

「！ 何でそういうこと早く言わないんだい！
悪魔の遺物が欲しいやつなんて、どこにもいやしないよ！」

ギョーラのやつ、血相変えて奥にすっこんだ。

へへ、ざまあみろってんだ。

ババアにやこのテの脅しが一番効くんだ。

それだけでなくもアイツ信心深くてさ。

人に結構なこと言う割に、迷信とか何とか、やったら信じてやんの。

あ？

火の精霊がなんだって？

んなもん嘘に決まってるだろ。

ほんでババアが首飾り持ってくるの待ってたわけだけど、横からす
つげー視線感じるわけ。

じろじろ見んなよと思ってチビっ子の方向いてさ……まービビった
わ。

そいつ、生き別れになった妹にそっくりだったんだ。

ぶつかぶかの黒いマント、着てるっていうか着られてるみたいな感じだよ。

顔の面積に比べてやたらにでっかい瞳が、琥珀やトパーズみたくキラッキラ。

俺の妹、ティネってんだけどな。

思わずそう呼びそうになっちまった。

ここまで声が出かかったところで、はっと我に返った。

いくら似てるからって、コイツがティネのはずねえんだ。

アイツがここにいるはずがない。

アイツは………ティネはもう、死んだんだから。

「お、おう………お前さん、何売りに来たんだ？

…これか？」

とは言え、妹そっくりの嬢ちゃんが困ってるの見過ごす気にもなれなくてな。

絶対え不自然だって分かってたけど、ちょっと声かけてみた。

喋れないらしい嬢ちゃんが指差して見せたのは、カウンターの上の…なんだ、キモノってやつ？

ほらボタンとなくて、オビとか言つぶつといヒモで締めて着る、

ローブみたいの。
すっげー触り心地がよくて、細かな縫い取りがいくつもあるんだ。
思わず目を見開いた。

「すげえ……！」

どこで手に入れたんだこんなの
どう考えたって、そこいらに売ってるようなもんじゃねえよな？」

おちびちゃん、俺の言葉に、さっと顔色変えてな。
ま、こんな小汚え質屋に来るくらいなんだ。
やっぱ言うに言えない事情があつたんだろな。
困ったように俺を見て、着物握って後ずさりし始めてよ。

焦ったぜ、怖がらすつもりなんざなかったんだから。

「あ、や違つんだ
何も聞きとがめようなんざ思っちゃ……」

「ほら、これだろ！
とつとと持って帰つとくれ！！
こんなもん、誰が欲しがるモンかい！」

カウンターの上のキモノを持ってその子が出て行こうとしたとき、
奥から出てきたババアが伸び上がって、俺に首飾りを押し付けてきた。

片手をカウンターについて、上からキモノを押さえる。

「たく…本っ当に性悪クソババなんだよな。」

多分俺らのやり取り、奥で聞いてたんだろ。

自分のいないところでどんな話するのか聞き耳立てて、人の弱みに付け込むんだ。

俺が藪へびやつちまったせいで、おちびちゃんが帰りたがってるってわかったんだろな。

どう考えたって、出てくるタイミングが絶妙すぎんだよ。

どうせ俺が帰った後、『いわくつきの服なんて他じゃどこも買い取ってくれない』とか何とか言っ、ひつでー値段で買い叩くつもりだったんだぜ。

「おう、たしかに

ようバーサン、それよりアンタ、これいくらで買うつもりだったんだ？」

これ絹だろ？

保存状態も良いし、すげー値段がつくんじゃねえか？」

「バカ言っんじゃないよ、ここを何処だと思ってんだい

確かにモノはいいかもしれなけどね、こーんな外来モン好んで着るような物好き、どこにいるもんかね」

「で、いくらだったってたんだよ？

結構長いことモメてたろ？」

俺の予想は当たってたみたいで、ギョーラは鼻息一つついてそっぽ

を向いた。

「なあ嬢ちゃん、一枚でどれくらいって言われてたんだ？
これくらいか？」

借りた分と利子の支払いは済んだけど、俺の手元にはまだ相当のゲ
ンナマが残ってた。

金貨三枚――30キヲ相当だな――を見せると、おちびちゃんは目を見
開きながら、ふるふる首を横に振った。

そうして恐る恐る、俺の手から金貨の一枚を伏せる。

買い取るとして一枚20キヲってか。

足元見やがってこのクソババア。

「バーサン、ごうつくも大概にしるよ

今更着飾ってどうすんだよ」

「黙れ若造が！ お前なんざにモノの価値の何がわかるってんだい
！」

「よく言っぜこのぼったくり！

俺の首飾りが48キヲだなんて、ふざけやがってよ

なあ、嬢ちゃん

あんた、これ売っ払っちみたいんだよな？

できるだけ高値で

だったらこんなごうつくババなんて止してよ、俺に売ってくんねえ
か？

三枚全部で、100キラでどうだ？」

「ケツ、ごうつくはどっちだい

こーんな手の込んだ品を、三枚100キラ？

人の足元見てんのはおまえだろうが」

「うっせーよババア

どうせお前、さっきまでもっと安値で売らせるつもりだったろうが」

「やめときな嬢ちゃん、こんな男に売ったって、大して大事になん
てしてくれないよ」

「黙ってるクソババア！

なあ嬢ちゃん、どうだ？

何なら少しイロつけてもいいぜ、100でだめなら110……や、
120くらいでどうだ？」

ガンガンつりあがる値段に、嬢ちゃんの困惑が見えた。

俺とギョーラの顔交互に見て、どっちの言うことが正しいのか、わ
かんなくなってるって感じ。

ババアが何て嘯いたか知らねえけどよ、嬢ちゃんの持ってきたキモ
ノあ相当な高級品だったんだ。

娼館なんかを持ってきや、一晚は十分遊べるくらいの値打ちはあっ
たと思うぜ。

「……150」

「オイ諦めろよ、嬢ちゃんは俺に売ってくれるってんだから

だろ、嬢ちゃん？」

「五月蠅いよアル中！」

あたしゃね、こっちのお客様に話してんだ、引っ込んでな」

狙い通り、ギョーラの顔色が変わったね。

金なんかのために目の前でお宝掠め取られるほど、ババアも耄碌してないってわけ。

「ねえお嬢ちゃん、さっきは悪かった、どうか水に流しとくれよこのキモノ、全部で150キラで買い取るよもちろん即金でね、どうかね？」

「150！？　っざけんな、これは俺が…！」

「あんた、今買い取ろうつたって手持ちは128までしかないんだろ？」

諦めな

ねえ、お嬢ちゃん？」

「…っ、の、強欲ババア……」

歯噛みする演技しながら、嬢ちゃんにウィンクをひとつ。

ぱち、ぱち、と瞬きしていたおちびさんだけど、合図に気付いて小さく俺に頷いた。

「……よかったな、嬢ちゃん」

店から心なしに嬉しげに出てきたから、もっかい話しかけてみた。
今度はフード上げで俺の方向いて、かわいい笑顔寄越してきやがった。

死んだティネのこと思い出すと同時に、何だかこっちもいい気分になつてな。

どことなくニヤついてたら、くいくいつと裾引つ張られて。

「ん？ 何だ……お、おいおいおい」

結構な力だよ、笑ったまんま俺引つ張って、スラムの方に行くわけ。
足取りからして、土地勘があるみたい。

ほっそい路地裏スラスラ進んで、俺でも行かないようなところ。

「おい、どこに連れてく気だ？」

先に行く嬢ちゃんは振り向いては笑うばっか。

途中、商売女が立ってたのとすれ違ってよ、まじー事とか想像したね。

もしかして、そういう謝礼でもするつもりか、とかな。

嬉しいような、イメージ崩れてちょっとがっかりなような気になっ

てた頃、嬢ちゃんの足が止まった。

「帰ったのかい？」

おや……お客さんも一緒かね？」

その先にいたのは、小さな台の前に座る小汚い占い師。

嬢ちゃんと同じように黒いマントにくるまり、杖を抱えて片膝を立て、壁に寄りかかるようにしてそこにいた。

やっぱり目深にフードを被っていて、顔は良く見えない。

占い師の問いかけに、嬢ちゃんがすぐ傍に寄って、キモノ売った金を渡した。

なあ、あんた『中性』ってわかるか？

時々いる、男でも女でもないヤツ。

ま、言い方によれば男でも女でもある、っていうか。

この辺で占い師っていうと、そういう奴がやってることが多いんだ。そこにいたのもやっぱり、男なのか女なのかわかんないような、そういう感じのヤツだった。

「……随分あるじゃないか

よくこんな高値で売ってこれたね

大丈夫なのかい？」

手渡された硬貨の重さと大きさを確かめて、占い師は気遣わしげな声をかけた。

同時に、空いたほうの手を持ち上げる。

嬢ちゃんはそれをつかまえて、自分の頬におしつけて。

それでわかったんだ。

この占い師、目が見えないんだ、って。

実際その後、嬢ちゃんはヤツの手のひらに、指で文字書いて意思疎通してた。

事のあらましを伝えたのだろう。

しばらくのやり取りの後、占い師が俺に向かって話しかけた。

「ねえあんた、そこにいる人

この子のこと、助けてくれたんだって？」

「あ、いや俺は……」

「ありがとうよ

この子にや何かと、おつかい頼むことが多くてさ

食ってくにしてもここんどこ、先立つもんが足んなくてね

本当に助かったよ」

「なに、大したことじゃねえよ

欲張りなババアに嬢ちゃんが引つかかってたみてえだから、ちょっとな」

占い師の声は、不思議な音だった。

聞きようによつて男の声にも女の声にも、どちらにも聞こえた。

『中性』っていうのには色々あつて、限りなく男寄りの女とか、その逆とか、そういうのみんな含めて『中性』とひとくくりにされている。

でもコイツの声はそうじゃなくて、本当に男と女のと真ん中、みたいな感じだった。

それがまた妙にいい響きでさ。

マントの下にはどんな姿が隠れてるのか、ちょっとばかり気になっちゃまった。

「……お兄さん、いい人だね
お礼にもなんないかもしれないけど、よかったら占いして行かないかい？」

「やあ、俺あ占いなんて……」

「まあいいからいいから
お代よこせなんて言わないさ
それにウチ、ナリはこんなだけで結構当たるんだよ」

正直、占いなんて信じるタチじゃねえんだよ、俺。

でも向こうさんはご好意のつもりみたいだし。
当たっても当たらなくても、まあ礼だと思っとけ、ってなもんで。

「じゃ……ひとつ見てもらうかな、お言葉に甘えて」

「ふふ、そうこなくっちゃ」

向こうさんに付き合うみたいな感覚で、俺は占い師の前にしゃがんだ。

占いにはカードを使うらしいが、奴さんは目が見えない。
どうするのかと思っていたのだが彼……や、彼女か？ ま、いい、とにかくヤツは、えらいこと器用に、台の上でカードをシャッフルして。

「リネットの逆位置……あんだ、誰か近しい人を亡くしたかい？
ここ半年……うっん、三ヶ月くらいの間に」

「！」

占い師が引いたカードに刻まれた人物は、メシア正教十三聖人の六番目。

誰よりも純真な心で傷ついた人々を癒した、声なき処女リネット。
教会で彼女が象徴するのは「心」と「心臓」だ。
そのカードが逆になって出たことはつまり、「喪失」や「死」
を意味するってワケなんだろう。

正直、ソツとしたわ。

ほらさっき言ったる？

生き別れになった妹がいて、けどもう死んでる、って。

それ、ちょうど三ヶ月前の事だったんだ。

「そんで……これはソフィアかな、また逆位置で出てるね…
あんだ、最近荒れてたね
道理で酒つくさいと思ったよ」

次に出たのが十三聖人の八番目。

街の孤児のために自らを売り、後にメシアの子と、その右腕である
占者クロノスの子を産んだ、聖女ソフィア。

大抵の教会では愛と繁栄の象徴とされているが、もとは娼婦だった
こともあり、宗派によって扱いが大分違う。

娼婦を聖人として神聖視したカードが、ひっくり返って悪い意味に
変わる…。

意味するところは退廃だの乱れた生活だの、そんなとこか。

嫌んなるわ、当たってやんの。

不思議なことに占い師は、めくったカードに触れるだけで何かわか
るらしい。

それも正位置と逆位置、どちらで出てるかまでわかるみたいだ。

そのうえ結構な中率ときた。

自分のこと、あんな風に見透かされんのって気味悪いのな。
これ以上何バラされんだと思ってよ、なんか背筋寒くなってきちまった。

「……お兄さん、当たりすぎててコワイとか思ってる？
ふふ、そりゃそうさ
私らこれでメシ食ってんだもの」

「ケ……ッ、かなわんな
当てんのは結構だけど、あんなヘンなモンまで見んなよ」

「ふふ……
あんまりコワがらせてもね、しょうがないもんね
じゃあコレで最後にしよう
近い将来は……」

カードをもう一度、全てシャッフルして出てきたのは、さっきと同じリネットのカード。
でも今度は正位置。

「あ！またリネット
あんたシスコンじゃないだろね？」

「……はあ！？」

いーやーヒヤつとしたわー！
まさかその嬢ちゃんのこと、死んだ妹と見間違えたところまでバレたかってなあ。

「あはは、うそうそ
でも、何か大事なものが見つかるみたいだよ
なくしたものとかさ」

「なくしたものの、ねえ……」

「なんかね、案外身近にありそうだよ
部屋の掃除でもしてみたら？」

「なくしたことも忘れてるような何か、見つかるんじゃない？」

「ふ、ん……」

あまり心当たりはなかったけれど、その時の俺にとっては、逆に安心できる結果だった。

まあ占いなんてこんなもんだよな、当たってたり当たってなかったりみたいだな。
なんて感じで。

目玉ヒン剥くことになったのは、それから三日後。
占いの結果なんざケロっと忘れて、あんまり汚い部屋の中を掃除していたときだった。

俺が見つけたのは、空の酒瓶やら脱ぎ捨てた靴下やらの向こう。
ベッドの下、なんだかチカチカ光るもの。

三ヶ月前、ティネが死んだ知らせを聞いた夜になくした、アイツと
揃いの碧玉の指輪だった。

2・形見と秘密と身の上話

俺は元々、山の鍛冶屋の息子だった。

おふくろは器用な人で、彫金の真似事みたいなのでてよ。

若い夫婦の結婚祝いに、揃いのアクセサリー作って祝ってやったりしてたっけ。

そんな感じで俺とティネにも、揃いで銀の指輪を作ってくれた。

石は俺らの目の色に合わせて選んだ。

けどティネのやつ、俺の目の色の石がいいってゴネてな。

だからお互いの石を交換することにした。

ティネの指輪の紅玉は、俺の目の色。

俺の指輪の碧玉は、ティネの目の色。

ばらばらになっても、指輪があるから寂しくないね、なんてアイツが話したことが、まさか現実になるとは思わなかった。

家族が離散したのは、十年前のでかい地震のせいだ。

俺の故郷だった山の麓は、特に壊滅的なダメージを受けた。

家屋敷が崩れるだけじゃなく、その三日前から降り続いていた雨のせいで地面が緩んでいて、山崩れまで重なったからだ。

里の多くの人が生き埋めになり、両親とも妹とも、そのときに生き別れになった。

俺はそれからこの街の鍛冶屋のジイさんに拾われ、『鍛冶屋のゴア』の名前と共に跡を継いだ。

家族のことは、時間をかけて諦めた。

生きてる可能性の方が低いことはわかりきってたし、あの事は早く忘れたかったからだ。

あれ以上に恐ろしい出来事なんて、俺にとっては他になかった。今でも時々、夢に見てうなされる。

テイネが今まで生きていたことを知ったのが死んだときだってんだから、人生も大概皮肉なもんだ。
更に笑っちゃうことに、最近隣町に引っ越してきてたらしい。
なあ、荒れるのもわかるだろ？

「おい」

「なんだ、またアンタかい
こちとらヒマじゃないんだけどね」

「よく言うぜ、客なんていつ来たっていねえじゃねーか」

「アンタがバカでかい声で喚くからさ
せつかく裏道の暗いところで店構えてんのに
占いってのはね、こっそり密かにやるもんなんだよ」

あのオオアタリをかまされてからというもの、俺はこの占い師たちのところに入り浸るようになっていた。

二人は良く似たような名前で、占い師はイル、あの嬢ちゃんはエルというらしい。

大抵の場合、あの路地裏にはイルが座っていて、エルに会えるのはごく稀。

それでも会えたときは、心のどこかに不思議な感慨があつて。

「お前……よくもまあ日がな一日座つてられんな
おかげでエルはいつもパシリじゃねえか」

「パ……やな言い方してくれるじゃない
仕方ないでしょうが、占い出来るの私だけだもの」

「ヘッ……んなもんカード切つて適当に一枚引けばいいだけだろ？」

「あまい！

よき明日の導となれるのは、研ぎ澄まされた精神の持ち主だけよ」

「……なんだ、案外信仰あるんだな」

「……えっ？」

「占者クロノスの章のことだろ、お前が言つてんの」

「……へえ、知つてるんだ」

「そりゃこっちのセリフだ
それよりもよ、ちったあエルに会わせろよ」

「あれあれあれ〜？
なに、最近良く来ると思ったらやっぱし〜
ひよつとしてアレ？
お兄さんロリコン？」

「！ バツカヤロ、俺の好みはこっ胸がポーン！としてだな…」

「……そろそろ帰ってくる、かな」

「おい、お前人の話聞いてんのか！？
俺の好みの女はだな」

「ああもういいから
占う気がないんならとっとと消えとくれ
エルが戻るんだ」

「チツ、んだよ……
まだ途中だつてのに…！」

ヤツが言い終わるか終わらないかのうちに、角を曲がってきたエルの姿が見えた。
紙袋をしっかりと抱えて、こちらに向かって駆けつけてくる。

「おかえり
頼んだもの、見つけられた？」

イルの問いかけに、エルはちょっと上がり気味の息のまま、袋の中のものを取り出した。
出てきたのは、ビロード生地で出来た高そうな箱。
貴金属や宝飾品を入れるようなケースだ。
それも結構なデカさ。

「！！！！」

何かをカモフラージュして持ってきたんだという予想に反して、中に入ってたのはど派手で高そうなネックレス。

本物か？

本物なのか！？

こんなデカイ金剛石マジであるのか！？

「うんと……そうそう、これコレ
あとそれから……」

イルはそのネックレスの宝石や、鎖のひとつひとつに触れてモノを確かめている。

どうやらこれをとってくる、というのが、エルに頼んだお使いだったようだ。

…ちょっと待て。

その『とってくる』ってのはどっいう意味だ？

「…おい、それどこから……」

「どこだろうと関係ないだろ
エル、『アレ』はどうした？」

「……」

見ればエルは右手をきつく握り締めている。
もの言いたげなエルの様子がまるで見えているかのように、イルが
片手を差し出して。

「お出し」

「…、……」

「ダメだって、ほら
そこに持ってるんだろう？」

「……」

「！　なんだこれ……ガラス？」

渋々エルが開いた手のひらにはガラス玉。

だけどそれはとても手の込んだもので、白地の小さな玉の中に小花の模様が『埋め込まれていた』。

花は淡い薄紅色。

その周りには葉をイメージさせるような帯状のガラス。

思わず手に取ってしまった。

見れば見るほど、小さな玉の中に繊細な世界が作りこまれていた。

春先の野っ原をガラスの中に閉じ込めたみたいで、見たことのない細工で。

「すげえ……こんなもん、どこで手に入れたんだ？」

「ちょっと、返しなよ」

それはこれから売りに出すんだから」

「う、売っちゃまうのか！？」

「ここらじゃこんなモン見たことねえぞ！」

「だから売るのが、カネになるからね
ほら、返しなそれ」

若干ぶつきらばうに突き出された手にそれを返すと、イルはまた指先で感触を確かめる。

気の済むまで確認した後、またそれを元のように袋に戻させて。

「じゃ、悪いけどこれ頼むね

店はどこでもいいけど、できるだけ高値で引き取ってくれるとこで

「…なあ

「なんだい、もうさっきから

「これ、どこから取って来させたんだ

「……聞いてどうするつもり？」

「エル、どっから持ってきた

見やったエルは、怯えたような目で唇を噛んでいた。
その様子からしたって、悪いけど考えられることは一つだけ。

「どこから盗んできた？

こないだのキモノ、あれもそうなんだろう？」

「止しとくれ、鍛冶屋のお兄さん

ガキ苛めてどうするんだい

エルが怯えてるよ」

言葉と共に片手を広げたイルの脇に、縮こまったエルが入り込む。

「どこから持って来ようと、あんたに関係ないだろ
もしこれが盗品だったとして、何だってんだい」

「……」

「……心配しなくても、これは間違いなく私のもんだよ
ま、どうせ信じちゃいけないだろうけどさ」

信じたかつて？

もちろん信じちゃいねえさ。

大体おかしすぎるだろ。

エルの持つてきたものは、ネックレスにしてもガラス玉にしても、
それこそお貴族様たちの嗜好品みたいな高級品だ。

どれひとつとったって、スラムの先の裏道でホームレスやってるよ
うな奴らが持つてるようなもんじゃない。

けれど確かに、俺はイルたちの生活に口出しできるような立場でも
なかった。

正しさを振りかざすのは簡単なんだ。

だけどいつでも正しく生きられるかってーと、それは随分と難しい。

わかってる。

清く正しく生きるのが、どんだけのことが。

「さ、エル

たびたびで悪いけどさ、早いとこ売ってきておくれ
危ないから気をつけるんだよ」

不安そうにしているエルを、勇気付けるようにさすりながらイルが
言った。

エルは複雑そうな顔をしながらも、イルの言葉にこくりと頷き、袋
を小脇に抱えた。

首飾りは結局、街の宝石商のところに売りに出した。
俺と同じ事を店の主人も思っただろう。

どう考えたって、裏道の浮浪児みたいな格好してるヤツが持つてる
ようなモンじゃない。

盗品なんじゃないかって疑いはあるけど、こういう商売ではそうい
うところには触れない約束だ。

帰り際、エルが持ってた紙袋は大きな布袋に変わり、中では100
キラ銀貨がじゃらじゃら鳴っていた。

あのガラス玉は……宝石商には売らなかった。
主人も随分興味を持っていたけど、俺がさせなかった。

俺が50キラ金貨一枚で買い取って、エルにやったからだ。

店に行く道中で聞いたら、エルは唇でゆっくり、『かたみ』と言っ
た。

かたみ、つまり『形見』だ。

寂しい単語を俺に告げるエルの目には、悲しみが映っているように思えた。

それで俺は、少なくともあのガラス玉はあいつらのもんなんだって信じようって気になったんだ。

そしたら見ていられなくなった。

どんな理由があるとしたって、肉親の『形見』を手放すのはつらいことだ。

何とかして、エルがそれを持ってられるようにしてやりたかった。あんな小さいガキにそんなことまで強要させるイルが、ひどく心無いヤツに思えて仕方なかった。

「……よかったな」

ガラス玉を光に透かして、ためつすがめつしていたエルが、俺に向かって顔全部で笑った。

初めて会ったあの日と同じその姿に、三ヶ月前のことを思い出す。

霊安室。

横たえられた身体。
渡された、手紙。

「！ あ、悪い悪い」

いつの間にか歩みの止まっていた俺の服の裾を、エルが引つ張った。顔つきもヒドかったんだろう、少し心配そうに俺を見ている。

けれどエルのそんな表情も、悪い意味でティネを思い出させるばかり。

何でなんだろうか、今までエルに会った時だって、こんなことなかったのに。

「…よかったか、それ、手放さないですんで」

余程手元を取っておきたかったものだったんだろう。

エルはにこにこしたままずと、しまいもせずにあのガラス玉を手のひらに転がしている。

「イルにバレないようにしろよ

怒られっちまうから、な？」

フード越しに撫でた頭の小ささはけれど、何も癒してはくれなかった。

3・悪夢

「私はリアナの里の鍛冶屋の娘、ティネです。十年前に生き別れた兄を探しています。」

ですが私にはもう時間がありません。

これを読んでくださった方、どうか兄を探してください。

ゴアという鍛冶職人に引き取られたそうです。

兄は私のものと同じ作りの、碧玉の指輪を持っています。

どうか兄を探してください。」

妹は机に突っ伏して、ペンを持ったまま死んでいたと聞いた。

直前まで最期の言葉を書いていたらしく、目も見開いたままだったとか。

死に方こそおかしかったけど、身体にはどこにも外傷がなかった。

一応警察が調べたけど何もわからず、結局病死することで話は落ち着いた。

「……」

ここは街の教会。

その裏手にある墓地のすみっこ。

足元の墓石に刻まれた、妹の名前。

あいつが借りてた部屋の大家に聞いた。
明るくて、いつも笑顔を絶やさない子だったって。

「ティネ……」

ここいらだけ、他の場所と土の色が違うし柔らかい。

そりゃそうだ、最近穴掘ってまた埋めたんだから。

エンバーミング（死化粧）を施されたアイツを棺に横たえて、花い
っぱい敷き詰めて。

ティネはもう死んだ。

死んで、今はここで眠ってる。

結局俺は、自分の心を誤魔化していただけだったのかもしれない。
離れ離れになった家族のことも、諦めたんじゃない、考えないよ
うにしていただけ。

この目で死んだことを確認してなかったから、考えさえしなければ薄い希望を持ち続けていられるだろ？

ほら、飼い猫が突然いなくなったときみたいに。

だから、今更ながらのティネの死が受け入れられず、酒に溺れた。そんなときに偶然出会ったのが、ティネそっくりのエル。

俺はティネにしてやりたかったことが、本当は沢山あって。

けれどもう、生きたティネはここにはいないから。

「…チッ」

初めてちゃんと墓参りに来たってのに、俺は花の一つも持っていなかった。

何か代わりに供える物がないかとポケットを探って、出てきたのはあいつと揃いだった指輪。

俺の気持ちなんてほったらかしのお天道さんの光を、碧玉が跳ね返してる。

「こんにちは」

「あ…」

話しかけてきたのは、この教会の神父様。

軽く会釈すると、すぐ傍まで近づいてきた。

この人にはここに来て早々に、結構な迷惑かけちゃったんだよな。たしか、この街に着いて最初の仕事がティネの葬式って言うてたっけ。

俺は頭ん中ぐちゃぐちゃだし、葬式の手順だの祈りの言葉だのなんて、全然だし。

「お墓参り、ですか？」

「…やっと、気持ちの整理がついてきました」

「心配していたんです、噂を聞いて妹さんとは、ずっと離れ離れだったんだそうですね」

「ああ……ほら、昔リアナで地震があったじゃないですかそれで……」

「！　そうだったんですか……」

「……」

痛ましそうな神父様の声音に頷いたとき、ぐっと胸に痛みがこみあげてきた。

それで俺はようやく、三ヶ月もたってようやく、自分がひどく悲しんでいたことに気がついた。

「本当は……まだ信じられないんです」

むしろ、信じたくない、っていうか……」

「……妹さんはいつも、あなたの傍にいます あなたの胸の中に」

「……はい」

途端に、視界がぼやけてくる。

涙をすすり始めた俺の肩に、神父様が手を置いた。

「すん……へっ、お恥ずかしいこっです
我ながら情け無え」

「とんでもない
大切な方を亡くすのは辛いこと
当然です」

ひんやりとした神父様の手が、励ますように俺のそれを握る。

「くれぐれも、思いつめないでください
何かあれば、私でよければいつでも相談に乗ります
もともと教会は、そういうときのための場所なんですよ」

「……ありがとうございます」

瑞々しく柔らかな声音が、ひりつく胸の奥に沁みた。

その晩、夢を見た。

夢ん中じゃ、俺はどうも夜の街を歩いているらしい。
目の前に見えるのは女の背中姿。

ありゃきつと娼婦だな。

シゴト一段落して、ねぐらに戻るとこなんだろ。

それにしたって、歩く俺の足が妙におぼつかない。

フラフラの足取りのまま、女のそばまで来た。

肩に左手を置いてみれば、当然だが女は振り向く。

瞬間、手のひらに感じるのは、ぬめった温度と、ぐっぐつと固い感触と、弾力に富んだ何か。

女は戦慄したように、目を見開いて身体を硬直させている。

― 才前、「力」ガ欲シクハナイカ？

俺の声は、俺のものとは思えぬくらいに酷くしわがれていた。
聞かれた女の方は、ただ恐怖と驚きに固まるばかり。

―要ラナイノカ？ 「力」ガアレバナンデモデキルゾ

―う、あ……た、すけ……

―才前ニチカラヲヤロウ

才前ノ願イヲ叶エルチカラヲ

―ひあ、あ……

今気付いたことだが、触れているぬかるんだ何かは酷く震えている。
女の肩に置いた方の反対側、右手だ。

俺が掴んでいるのは何なのだろう。
何だかびくびく動いている。

―たすけ、たすけて……

疑問のままに下げた目線の先。

俺の手は、女の肌の下に潜っていた。

手のひらに直に感じていたのは、女の鼓動。

握り締めているのは、今まさに動いている、女の………

「!」

どこだここあ。

あ、あ？

俺ん家か？

俺の手はどうなった。

！

女！

女あどこ行つた！？

こつちが現実だつてことで我に返つたのは、
散々部屋を見回し、手に血がついていないか確認しまくつた後。

「…っ、ちつくしよ、夢か……………」

それにしたってリアルだった。

歩いてたところだって、よく知ってる道だった。

なじみの飲み屋からちよっと入ったところ。

商売女たちが、客を求めてうるついていることも少くない通り。

「きもちわり……」

手に残る感触の気持ち悪さに、洗面台に駆け込んで蛇口を捻った。

勢い良く出てくる水で、夢の名残を洗い流す。

冷たさに痺れを感じるようになるほどに、消したい現実感が増えていくばかり。

ついでに二三度顔も洗って、正面の鏡で顔つきを確かめる。

「ケツ……………」

燃え立つ色の短髪に、同じ色の瞳の無精ヒゲ男が、目の下にクマ作ってこつちを睨んでいた。

——ここいら、だったな……………

30分後。

俺はさっきの夢と同じ道を歩いていた。

どうにもひっかかったんだ。

ただの夢で片付けるには、あんまりにもリアルすぎた。それに、どうしても気になることがひとつあったし。

夢の中の俺の、女の肩に置いた手。

左手の人差し指には、ティネが持ってたはずの紅玉の指輪が嵌っていた。

そう、俺と揃いのあの指輪。

あいつが最期に残した手紙にも書いてあった件の指輪は、俺が霊安室に行ったときにはもうなかった。

警察にも聞いたけど、発見当初からティネは指輪なんてしていなかったらしい。

遺されてたあの手紙はおかしかった。

死んでた状況にしたって、何かこう、不自然じゃねえか。大体なんで、遺書にまで書いた「指輪」がないんだ。

どうしてティネは死んだんだろう。

警察が言った通り、本当に病死だったんだろうか。それもだが、ティネの指輪はどこに行ったんだ？誰かが持ち去った？

もしそうだとしたら、そいつは一体誰なんだ。何の目的で、ティネの指輪を奪ったんだろう。

ティネが死んだことと指輪がなくなったことに、なにか関係があるのだろうか。

意識的に考えないようにしていた疑問が、ここにきて一気に噴きあがる。

「……………」

今まで考えないようにしていたのには、俺なりに理由がある。

こんな小さな謎を解明したって、何一つ変わりやしないからだ。

どんなに考えても、調べて謎を解いたとしても、ティネはもう戻ってこない。

どう足掻いたって、死んじまったティネは生き返りやしないのだ。だったら何かしたって、しなかったって、結局は同じこと。

半ば本気でそう思っていたからこそ、あんな夢を見たことが解せなかった。

しかもこのタイミング。

まるで、全然進まない謎解きに、痺れを切らした誰かがヒントでも出してみたいに。

もしも、もしもティネが病死でないのだとしたら。

（ティネは誰かに殺されたのかもしれない。

何か、普通じゃないおかしい方法で。）

あいつの紅玉の指輪がなくなったことと、ティネの死に何か関係があるのだとしたら。

（指輪は何かの理由で、犯人が持ち去ったのかもしれない。

アイツの指輪がどこにあるのか、突き止めるべきなんじゃないのか。）

犯人は、ティネにしたのと同じ方法で、また誰かを殺そうとしている……？

「へ……っ、絶対えありえねえだろ」

十中八九ないだろうとは思っ。

確証も証拠も、どこにもないんだ。

いくら俺が頭悪いからって、一直線に妄想に突っ走るほど馬鹿じゃ

ねえ。

でも、だ。

世の中には「正夢」って言葉もあったりするわけで。
案外こういうときのカンって当たったりもするわけで。
だからアホだとは知りつつ、こうして無駄なこととして、可能性を潰
してみたりする。

まあ、これは俺自身の不安解消に繋がってもいるわけで。
そういう意味では、完全に無駄とは言い切れない部分も……

「！」

しばらくフラフラしても人の姿がないもんだから、そろそろ帰ろう
か、なんて振り返った先。

夢に見たのと同じ女が歩いていて。
思わず物陰に隠れて、その様子をつかがう。

何が驚きって、女も同じなら来ている服から歩いてる場所から、何
もかも夢の通りだったってこと。

ほら、長い髪の毛後ろに流す仕種までそのまんま。

―ウソだろ、当たりかよ…！

しかも正夢は、そこだけで終わらなかった。

女が角を曲がった時、どこからともなく現れた人影が、背後から近づいてきたのだ。

足音もなく忍び寄って、だんだん距離を縮めてきてる。

夢の中の俺と同じ、なんだかフワフワしたような、おぼつかない足取りで。

「……」

目の前で起こっていることが信じられず、足がすくむ。

正直、ゲロ吐きそうに気持ちわるい。

ここまで夢の通りだなんて、ありえねえ。

でもきつと、これから先に起こることだって、きっと夢と同じはず。

ヤツはじきに、あの女に追いつくのだ。

そうして背後から左肩を掴むだろう。

その瞬間、人差し指に嵌めたティネの指輪が光るのだ。

驚いた女が振り向いたところで、ヤツは女の心臓を……

――！

俺の見た悪夢が再現されようとしていたまさにその時、突然目の前を黒い塊が通り過ぎた。

その時俺は、二人から少し離れた路地に隠れていたのだが、塊の正体は小柄な人影。

外套の裾から見える、伸ばした右手に光るのは……鉤爪？

――シャツ――！！

そいつは今まさに女に触れようとしている、怪しいヤツの、背中にむかって切りつけた。

が、敵もさるもの、紙一重でそれを避ける。

「シャアアッ――！！」

次には負けず劣らぬ鋭い爪を繰り出し、相手に向かって反撃。
刺し貫くように素早く突き出したかと思えば、縦横無尽に腕を振って切り裂くように。

その攻撃の全てを避ける相手は、ヤツよりひと回りもふた回りも小さい。

「キシヤツ！ シャアアアアアッ！！」

だんだん頭に血が昇ってきたのだろう。

獣じみた威嚇の声がおどましく、深夜の路地裏に響き渡る。

「えっ？ ！ ひ、きゃああっ！！」

突然自分の真後ろで始まったのが戦闘だとわかった女が、しばらく経って悲鳴を上げた。

それを合図にしたように大きな影は跳び上がり、民家の屋根の上に軽々とのぼる。

小さな影も追いかけるように跳び、ひらりと屋根の上に着地。

— シャアアアアアッ！ キシャアアアアアッ！！

二つの影は屋根から屋根へと飛び移り、ぶつかったり離れたりを繰

り返しながら遠ざかり、最後には見えなくなった。

「……………」

人間じゃなかった。

明らかに、ただの人間の動きなんかじゃなかった。

足場もなく、ひとつ跳びに屋根まで跳びあがれるようなヤツがいる
と思うか？

目にもとまらぬ速さの攻撃だっそうだ。

あの気持ち悪い声だっ。

後に残されたのは路地裏でしゃがみこんでる俺と、腰を抜かした女。

「何なんだ、一体……………」

空はうつすらと明るさを得て、深夜から黎明へと変わろうとしていた。

4・キタイハズレ

「……………正夢え？」

相手には見えないと知りつつ、俺はこっくりと頷いた。
例によって例のごとく、エルはおつかいに出かけていてここにはいない。

正面のイルは右腕に杖を抱えたまま、左手で頬杖。

「そおねえ……………その夢の中身にもよると思うんだけど
どんな夢なの？」

「……………」

「…ちよつと、何で黙っちゃうかな」

「言ったら絶つつ対え笑われる」

「？　なんで？」

「……………」

「なによ？」

もしかして、そんなに突拍子もない夢なわけ？
それとも……………あ、もしかしてコツチの話？？？」

「違えつつの」

言いながら股間を指差すイルは、何ともイキイキした表情。

目深に被ったフードに、鼻と口元だけしか見えなくなっただけでおもつきし分かる。

占い師としてというより、野次馬根性まるだしの好奇心むきだし。

あの日から、一週間。

俺は毎晩、同じ夢にうなされていた。

目の前で見たあの光景が、眠ると必ず繰り返されるのだ。
寝れるわけねえだろ。

……だつてのに、こんなにやる、楽しそうな顔しやがって。
こっちゃん寝不足に寝不足が重なって、グロッキーもいいところ。

「ま、まあまあ、そんなイライラしないでさ
とりあえず喋ってみようよ、ね？」

「……誰にも言わねえだろな」

「勿論！ その辺はね、信用して」

「……絶対え茶化すなよ」

何度も念押しを繰り返した後で、俺はあの日から続く悪夢について

話した。

夜の街。

ひとときわ暗い裏道を歩く女の背中。

それにゆっくり近づいていく俺。

背後から女の肩に手を置いて、相手がこちらを振り向いたところで……。

—キシャアアアアアッ！！

「ふう、ん……そ、そりゃまた」

「そりゃまた？」

「はぁ……なんていうか、ねえ？」

「…なんだよ」

「……」……「コメントしづらいなあ……」

フードの下のイルの顔が、シヨッパイ感じに歪む。

鼻先と口と顎しか見えないんだけど、それでも十分『セリフ通り』な表情をしていることがよくわかって。

「マジだって、途中まで正夢だったんだって！
俺あん時この目で見たんだ、黒い影が女に！」

「心臓ブスッとやろうとした？」

「おう」

「そのときもうひとつの影が後ろからやってきて？」

「おう！」

「二つの影がチャンチャンバラバラ？」

「おう！！」

「超人的な動きでやりあって、最後は屋根まで跳び上がって逃げたって？」

「間違いねえって、俺あすぐ傍で見てたんだ！
後ろからあいつが来なかったら、女は絶対やられてた！
なあ教えてくれよ、コレって一体どういうことなんだ！？
何で俺、そんな予知夢めいたもん見ちまったんだ？
何でそれから一週間も、同じ夢見るんだよ！」

「チツ……んんー……」

話す前は何だか楽しそうだったのに、何だか煮え切らないというか、微妙というか。

外套の中に手え突っ込んで、胸元や頭搔いてみたり。どう見ても、回答に困ってるって感じ。

何だよ、お前占い師じゃないのかよ。

「も、何なんだよさつきからその態度は！こっちや喋るにもかなり勇気要ったんだぞ！！」

「だって……こんな話されたってさあ」

「耳の穴をほじるな耳の穴を！
だいたいフードの上からじゃほじるにもほじれないだろが！」

「おっと」

「だからほじるなっつーに！
お前占い師だろ、こついうときに相談に乗るのが仕事じゃないのかよ……」

「そうだけどさー……」

「な、教えてくれよ
こついう時、どうしたらいいんだ？」

「んー………怒んない？」

「はあ？」

「いや、アドバイスはあるよ？
あるけどさー……………」

「なんだ、あるなら教えてくれ！
俺あこう見えたってな、案外人の話は聞く性質だから」

「こういうこと、言いたくないんだよね…」

「なんだよ、そういうの方がかえって気になるだろ！」

「あー…………ま、そうか…」

「おいイル、てめ大概にしろよ」

はつきり言つて、俺は気の長いほうじゃない。
これ以上無駄な会話が續くとなると、ご自慢の商売道具に八つ当た
りしちまいそうだった。
占い師じゃなくても、空気がヤバイのはわかるだろ。
これだけ声が低くなつてたらよ。

「わ、わかった、わかったよ
先に言つとくけど、聞いても怒らないでよ」

「そりゃ中身によりけりだな」

「…………だからやなんだよなあ…………」

居ずまいを正し、改めて長居を決め込んだ俺の気配に、イルがぼつりこぼした。

「えっと、結論から言つと……気にしないことだと思つたよね
ちよちよちよ苦しい苦し、やめてその手離して！
今からちゃんと説明するから！」

「つたりめーだ！
こんだけ真剣に話さしといて、言いづらそうにうにやうにやした後
のアドバイスが『気にするな』だあ！？
どういう意味だかキツツチリ説明してもらおうじゃねーか！！」

「わかった、わかったから！」

最初の一言で、大して丈夫でもない堪忍袋の緒がぶつつりイってしまつた。

首元に掴みかかれば、思いのほかイルは重い。

中性的な印象は、至近距離になると案外外れているようだ。

顔の見える部分や声こそアレだけど、こうしてみると思ったよりも男っぽい。

そのくせ俺の手をはたくこの力の非力なこと！

「げほ、ゴホ……っ
だからやだつたんだ……」

「中身によるつつたろうが
で、どういうことだ『気にすんな』ってのは！ あんなモン見て気にしないでなんていられっかよ!!」

「や、気持ちわかるよ
わかるけど……」

正味のところ言うとさ、夢って、みんなが思ってるような神秘的なものなんてないんだよ」

「…あんだって？」

「要は、夢ってのは見てるご本人さんの想像の産物ってこと
最近考えてたこととかがごっちゃになって、意味わかんないストーリーになってるのが、隠喻っぽく思えちゃったりするだけなんだ
そりゃさ、こんな夢を見たのは現実でこうだからに違いない、なんて言う占い師もいるよ？」

その方がミステリアスっていうか、いかにも自分にそういう力があるように見えるもん」

「お前は違うのか？ 占い師のくせに？」

俺の質問に、イルは首をすくめる。

「そんなセコいやり方しなくたって腕あるもん、私」

「セコ……斬って捨てるなあ……」

「正夢だったっていう最初の一回はさ、悪いけど偶然なんじゃない？
見た夢って、お兄さんが良く見知った通りでのことだったんでしょ？
この辺危ねえよなー、とか、飲んだ帰りに歩きながら思ったことないの？」

「……」

「実際に見に行ってみたら、ホントにヘンな黒い影が出てきて、って話もさ

悪いけど、アヤしい奴らなんて全然珍しくないじゃん

魔物だのアブない奴だの、その辺うじゃうじゃしてるもん

街の外なんかだと、旅人が襲われたなんて話も少なくないしさ

私やエルだって、見る人によってはそのアブないのに入ってるだろうしね」

「お前らあただの占い師とパシリだろ」

「そうだけど、こんな裏道知らないで生きてる方々だっているわけでしょ？

そういう恵まれたお方たちからしたら、私らだって十分魔物と同類さ」

「……そんなもんか？」

「多分ね

で、話元に戻すけど……」

同じ夢何度も見ちゃうのは、ショックだったからなんじゃない？」

「ああ？ ショックだあ？」

「だからつまり……」

おにーさん、見た目より繊細だったっていうか、ナイーブだったっていうか……

！ぐるじ……も、やめてよさつきから！」

「おい、フザけるよ、俺のどこがナイーブなんだどこが」

再度掴みかかる俺に、今度は本気でその手を払いにかかったイル。本人は相当な力を出したつもりなんだろう。

俺にとつちや屁のツツパリにもならなかったのだが、何故だかイルの方が痛そうに手を振っている。

「痛あ……もー……」

だからさあ、偶然の正夢のせいで、あわや女性が魔物に襲われそうになるとこ見ちゃったんでしょ？

ほんでヤバそうな連中同士の戦闘も、目の当たりにしちゃったんだよね？」

「……おう」

「そんなん目の前で見たの、きつと初めてだったんじゃない？前にもそういうの、見たことあるの？」

「……………」

いや、ないだろ普通。

生きててそんなもんは何度も遭遇してたまるかってんだ。

だいたいあのリアナの地震以上に怖いもんなんて……………。

「はつきり言うよ

オニーサン、怖かったのさ

自分で自覚してるよりも、ずっとね

だから頭に焼き付いてる

焼きついてるから夢に見る」

「……………」

「とにかく、気にしないことだよ

あんまりそれに関わることに、もう考えない方がいい

マトモなアドバイス、するなら私にやこれっきゃないよ

納得してもらえないなんて、わかりきってるけどね」

「……………」

「はあ……………」

言いづらかった理由、これでわかってくれるかな？」

「……………」

正直、すぐには言葉が出なかった。

イルの言ってることは普通っちゃ普通。

無難っちゃ無難。

なんだが、同時に実に筋が通っていて、なおかつマトモ。

頭ん中を整理させ、納得させるには十分なくらいの説得力があった。

でも、頭でわかってるからって気持ちまでついてくかつつと、人間はそんなに単純でもないわけで。

俺は確かに、見た夢の話はした。

けれどひとつ、伏せておいた事がある。

ティネの指輪のことだ。

無くなってしまった俺の妹の形見を、夢ではアヤしい奴の片方が嵌めていたこと。

あの日現実のアイツも嵌めていたのかどうか、確認したかったがで
きなかった。

夜の暗がりに加えてあの素早い動き。

見知った指輪をしているかどうかなんて、そんなところまで見えなかった。

指輪の話題を出さなかったのは、単に込み入った事情について端折
りたかったからだ。

ティネが死んだところから話すとなると、俺の身の上話も関わって
くる。

いくらなんでも、道端に座りこんで客待ちしてるような占い師に話
すようなことじゃない。

それも話した方がいいかと考えていた時、はっと閃いたんだ。

占い師なんだから、それくらいのことはわかるんじゃないのか。
それこそ、カードでも使えば。

「なあ……今日は何でカード使わないんだ？」

こっちからは口が開けないことがあると察してもらえることを期待
して、イルを促した。

さつき本人が豪語したんだ。

悪戯に自分を『神秘の存在』に仕立て上げる必要はない。
そんなことしなくても、自分には腕がある、って。

そんだったら、これくらいのことはわかってくれるだろ。

「必要ないもん」

「……なんで？」

「だってお兄さん、こういう話で隠し事ができるような人じゃない
でしょ？」

「わかんねえぞ、そんなの」

「わかるさ、こちらら占い師だよ？」

「……俺自身、気付かないうちに何か見落としてたりするかも、な

んてのはねえのか？」

「ほら、そうやって深く考えるのが良くないんだって
たとえば見落としてることがあるとしたって、それとお兄さんの悩み
は関係ないよ」

「……………」

「寝不足なんですよ？
そんなことばっか考えてると、ホントにノイローゼになっちゃうよ
？」

期待は、おもつきし外れた。

「……………そか
気にすんな、か」

「…それっぽいコタエじゃなくて、申し訳ないけど」

「いんや、よくわかったわ
だよなー、やっぱ考えすぎかもなー」

偶然。

考えすぎ。

気にしない方が良い。

一週間前まで自分で思っていたことなのに、イルに言われるたびに
気持ちが悪く。

「魔物目の前で見たのが初めてだった、ってのが大きいんじゃない？
それに今回はさ、妙な偶然も重なっちゃったし」

「…そうかもしれないねえ
悪いな、なんか、ヘンな話しちまって」

「…お代、いいよ
全然占ってないし」

力の抜けた俺の様子を案じてか、ポケットに手を突っ込んだ俺にイ
ルが言った。

そんなセコい真似するつもりはハナっからないから、言葉を無視し
て放り投げるコイン一枚。

「元氣、だしなよ？」

立ち上がった背中にかけられた励ましに、振り返らないまま右手を
あげた。

— …聞いてた？ 今の

— ……

— 見られてたみたい、ちょっとマズいかもよ

— ……

— 一人で無理しないでね
ヤバくなりそうなら、ちゃんと教えて

「んだよ、あの程度か…」

落胆は、思いのほか大きかった。
あれで結構、俺は期待していたらしい。
いっちゃん最初の占いだって当たってたし、
今度もそれなりなこと
言ってくれんじゃないかって。

なんだよ。

結局、占い師は占い師でしかないってコトか。
適度に当たってて、適度に違っていて、聞いた本人の受け取り方にお任せします、ってな。

「大したことねーじゃんよー……」

スツキリしない気持ちのまんまに、軽く小石を蹴っ飛ばしてみたら、ある人の足元に転がった。

「！ 神父様……」

「あ…ゴアさん、ですか？」

「はい、あの、すみません……」

さしかかった十字路の、右の角からこちらに曲がってきたのは、あの教会の神父様だった。
俺の名前、覚えていてくれたらしい。

「……何かあったんですか？
顔色が……」

「あ…や、大したことないっすから
ちよっと、寝不足で」

「ちょっと？」

それにしてもすごいクマですよ」

「あ？ はは…これね、すぐ出るんすよ

ほら、俺色白さんだから

ほんと、大丈夫っす」

「夜、良く眠れないんですか？

なにか心配事が？」

「や……心配事、つつつか、」

何とも言いよどむ俺に、神父様はちよつと思案げに視線を動かして。

「…………ゴアさん、今日お時間ありますか？」

「…え」

「よかつたら、ちよつと教会にいらつしゃいませんか？

何か、人に相談したいことがおありなんじゃないですか？」

すげえ、さすがは神父様。

顔つきだけでわかんのかな。

それとも俺、そんなヒドい顔してたかな。

「ムリには言いません

でも、もしお話を聞かせてくれるなら、教会で待っていてください
私、用事済ませてすぐに戻りますから」

俺の返答を待たずに、神父さんは人好きのする笑顔で俺の肩をとん
とん、とはたき、さっさと行ってしまった。

5・薔薇の刻印

ところでよ、薔薇十字が他の鍛冶屋と何が違うか、あんた知ってるか？

…って、知らねえよな。

薔薇十字も知らなかったんだもんな。

悪い悪い。

俺らと普通の鍛冶屋の違いは、ハンターのオーダーメイドを請け負うってのと、もうひとつ。

『刻印の儀式』を行うことで、武器に精霊の力を宿すんだ。

なんたって、相手は魔物だからな。

物理的な殺傷能力だけじゃなくて、悪いもの、邪なものを消滅させる力も必要ってわけ。

どうやるんだって？

そりゃそんな簡単には教えられねえさ。

企業秘密、ってヤツ？

……ぶふっ！

嘘ウソ！

隠すようなご大層なことなんぞ、なんもねえよ。

俺あただ単に、死んだジイさんに教えられた通りの手順踏んでるだけ。

武器水に突っ込んで、覚えさせられた祝詞うにやうにやうと唱えて、できあがり。

俺にはよくわかんねえんだけど、見るヤツを見ると、それだけで武

器が全然違うことになってるらしい。

どうも…なんつーの？

ほらあれだ、カリグラフィーっていうか、装飾っぽくした文字みたいな模様がずらっと入るんだと。

そうなんだよ！

自分でやってんのに、俺には全っ然見えねーの！

刻印は見えるヤツと見えないヤツがいて、どうも俺は見えないヤツらしいんだな。

いや、俺もそう思うわ。

よくこんなんで薔薇十字背負ってるよなって。

でもよ、聞いたとこだと俺が施した刻印って、ちょっとしたモンみたいなんだぜ。

いつだったかな。

流れモンのハンターくずれが家の看板見て、カケコミで武器の手入れ頼んできたことがあったんだ。

俺あいつもの通りやっただけど、まーそのハンターの驚きようつたらなかったね！

なんかもお目えキラッキラさせて、地面にひれ伏して俺のこと拝んでったもんな。

まあな、機嫌のいいときなんか、死んだジイさんによく『お前は天才だ』なんて言われてたし？ 自慢すんなってか、ははは。

ああ？

全然嬉しくなさそうだった？

だつて考えてみるよ。

自分が何やってんだかわかんねえんだぜ？

自分のしてることの成果が目に見えねえんだ。

そんなもんについていくら称賛されたって、正直微妙だろ。

気分はハダカの王様みたいなもんよ。

ほら、目に見えない服着せられてんのに、周りの奴らあみんな『良くお似合いです！』ってな。

意味わかんねえだろ、うん。

—ジャバ……ッ

「ふいふ、一丁アガリ、つと」

刻印の儀式の済んだ武器を、水の中から引き上げた。
これが最後の工程だ。
水気が飛んだら完成。

今回の依頼は武器への彫刻と、刻印の儀式。
武器にバラの花の彫刻を施し、精霊の力を与えてハンターの武器と
して仕上げる事。

「へへえ…イイ出来なんじゃないのお？」

あ、違う違う。

これあな、『彫り』の感想。

こーれがまた大ッ変だったんだわ。

何しろ彫っていい場所は狭いし、図柄は細かいし。

面積ほんの親指の先ほどだぜ？

一輪分だつて一苦労だつてのに、花は二輪分、しかも散った花びら

まで入れるときた。

それも手彫りで！

我ながら、毎日良くやつたと思うわマジで。

儀式が済んだら、水気は拭わずそのまま自然乾燥させる。

先代のジイさん曰く、水にも力が宿っているのだとか。

『タダの水じゃねえ！聖水だ聖水！』って、良く怒鳴られたな。

『刻印の持つ力は、刻印の美しさに比例する。』

刻印の美しさは、薔薇十字の腕とかけた手間に比例する。

よお坊主。

祝詞は時間を惜しまず、丁寧にあげんだぞ。

光の力を宿すハンターの武器とその持ち主への敬意を、常に忘れないことだ。

覚えとけよ。

尊い力つてのはな、尊い心に応えるもんさ。』

ジイさんいつもそう言いながら、バカでかい酒瓶呷ってたわ。

それにしても、今度のハンターの武器はちょっとばかりユニークだ。なんだか変な名前……そうだ。

『クナイ』、とかいうんだっけ。

今回だけでも全部で50本もある。

（つまり俺は100輪のバラの花を彫ったってわけ！）

大きいものから小さいものまで種類があるけど、形はどれも同じ。そのうちのほとんどは、手のひらに収まっちまうような小さいものばかりだ。

どうやって使うのかと思ったら、持ってきた教会本部の使い曰く、なんとこれを『投げる』んだとか。

当たるのか？って聞いたら、ヘタな鉄砲よりよっぽど、だと。

「すげえよな……」

いくら小っせえったって金属だ。
持てば結構な重さがある。

だつてのに、件のハンターはこれを離れた場所にいる魔物にブン投げて、一発で仕留めるらしい。
どんだけ強肩なんだか。

「……………」

ハンター。

メシア正教会公認の退魔師。

聖護符の加護を得た、魔物を狩ることを生業とするヤツら。

大抵の場合、薔薇十字と教会お抱えのハンターが顔をあわせることはない。

双方のやり取りは教会本部の使者を介して行われるからだ。
だからハンターは、誰が自分の得物に一仕事加えたのかを知らない。
俺らも、こうして手入れしてるモノをどんなヤツがつかうのか、わからない。

正直なところ、気にならないって言ったら嘘になる。

このクナイの持ち主は一体どんなヤツか。

これを使って、どんなバケモノを仕留めるのか。

今だって、聖水に残りのクナイを浸しながら考えてたりするし。

「ああ……やめやめ」

大事な仕事だったのに、すっかり手元がお留守。それに気づいて、緩く頭を振った。

とりあえず、今はコツチに集中しねえと。

依頼分はこれで終わるし、ほかの事はそれからだ。

頭を切り替えようとしている視界の端で、水の中のクナイがチカチカ光っていた。

「こんにちは……？」

仕事を終えた後、俺はジユダ神父のいる教会に顔を出した。

あ、『ジユダ』ってのはあの神父様の名前な。

「！　ゴアさん、いらっしやい」

敷地いっばいに咲く白薔薇の手入れをしていたらしいジユダ神父は、こちらを振り向いてにつこり破顔。片手を挙げると、そのままこちらに近づいてきた。

「その後、調子はいかがです？」

「はい、おかげさまで
も、すげー良く眠れます」

「それはよかった
ね、案外馬鹿にできないでしょう？」

「へへ……」

何のことかってーと、このあいだ。
イルのここからの帰り道。

偶然出会った神父様が俺の様子を見かねて、時間があつたら教会に
来ないかって誘ってくれた後のことだ。

ちよつと迷ったけど、あの日結局、俺は神父様の誘いに乗った。

勝手に入った礼拝堂、手持ち無沙汰に帰りを待っていたら、神父様
は息を切らして戻ってきた。

急がせたことを悪がる俺を奥に案内して、ハーブティーまでご馳走
してくれて。

『そうですか……毎晩そんな夢を』

『も、マジ勘弁っスよ
いくら眠くなったって、寝るたび悪夢っすもん』

『なるほど、その目の下の酷いクマはそのせいだったんですね』

親身に話を聞いてくれるジユダ様に、俺はきつく目を瞬かせながら頷いた。

気になることは山積みだ。

あの夜見たものの正体、ティネが死んだ本当の理由、指輪の行方。その上眠れば毎日悪夢。

この状況でマトモな睡眠がとれないってことは、大分キツかった。

『何か、良く眠れる良い方法ってないっすかね？
も、深く眠っちまえばいいと思うんすよ
夢なんざ見ないくらいに』

『うん……まず眠ることですよ
しっかりね』

そうです。

その通りなんです神父様。
俺あここ数日、もお眠くて眠くて。

『あの、安眠に効くお香とかいかがです？』

『……お、お香、ですか？』

『はい、これが案外良いんですよ
騙されたと思って、一度試してみませんか？』

『は、はあ……』

勧められた香は、そのまま嗅いでみたところかなり甘い匂いがした。
ちよつとキツくて鼻につくような気もしたから、本当にこんなもんで眠れんのか半信半疑だった。

ところが火をつけてみたところ、香りは一変。

最初の印象よりもずつと俺の好みで、その夜は久々によく眠れた。
やっと悪夢から解放された俺は、それからずつと、神父様にもらった香を愛用していて。

「どうしたんですか今日は？
何かありました？」

「あの、それなんすけど……その…
あの香って、どっかで売ってるモンなんすか？」

「もしかして、気に入っていただけた？」

「へ、へへ……」

俺は後頭部を掻きむしって照れ隠し。

だってそうだろ。

俺みたいなのが『お香で癒されないと眠れないの』って！

なんか、色々間違ってるっていうか、イメージと違いすぎるっていうか……。

「そんなに気に入ってもらえたんですか
それは嬉しいな」

「やーも、今じゃアレ無えと眠れなくて！」

「あら、そんなに？」

でもねえ…あれ私が調合したモノなんで、他じゃ売ってないんですよ」

「えっ、そうなんすか!？」

知らなかった。

香って、調合できるもんなんだな。

花やなんかのオイルを取って香料にするってのは知ってたけど、なるほどブレンドもしちゃうわけか。

「はい……すみませんね」

「そーか、売りモンじゃなかったんすかー
なんだもつと大事に使えばよかったなー……」

「……あれ、もしかしたら残りどつかにあるかもしれないな
ちよつと、待っていてもらえませんか？
奥で探してきましょう」

ジユダ様の返答に、あ、しまった、と思った。

俺は本当に、どこに行ったら手に入るかが聞きたかっただけなんだ。
神父様の手作りだったなんて、知らなかったし。
でもこれじゃ、せびりに来たようなもんだ。

まずったな、そういうんじゃないのに。

「あ、や、いいつすよそんな
ホント、どこにあるもんなのか、聞きたかっただけなんで」

「気に入ってくださってるんでしょう？
だったら、遠慮しないでください
このままうちのどこぞで、使われないで眠っているよりもずっと
いい」

「でも、タダでもらうってわけには……」

「お気になさらず
そんな大したものじゃありませんから」

「い、いいんすかねえ……」

「もちろん
それよりも、ゴアさんがよく眠れる事の方が大事でしょ」

「なんか……申し訳無えっす」

「そんな、とんでもない」

「あ、いや本当に」

「いやいやいや」

結局、ジユダ様の親切に甘えることにした。

いつまでも遠慮してばっか、ってのも、かえって失礼な気がしたから。

俺が恐縮してお辞儀すれば、神父様はもっと深くお辞儀。それに更に恐縮する俺に、また神父様が礼を返し。

ーぼろ

「あ、おっと…」

二人してコメツキバツタみたく頭下げあってる間に、上着のポケットに入れていた指輪が落っこちてしまった。ころころ転がって、ジユダ様の足元まで。

転がってきたものを拾いあげたジユダ様が、ちよつとばかりし表情を

変える。

「…これ、は？」

「ああ……おふくろの…形見、ですかね」

「お母様の…すごい意匠ですね
しかも手彫りですか」

「わかるんすか？」

「ちよつとかじつた程度ですけど

！ この石！

リアナの碧玉ですね！」

「…なんすか？」

「これは間違いなくシオン山の碧玉ですよ
これだけ透明度が高くてかつ深い青緑色をしたものは、シオンでしか採れないんです」

お布施とかご寄付とか、そういうので見る機会が多いんだろう。
それにしたって、ジユダ様えらいテンションの上がり方だな。
宝飾品、そんなに好きなのか。

……いいのかよ、聖職者だろ。

妙なところで垣間見た人間臭さが可笑しい。

やっぱ神父様つても、人間なんだな。

「はは……」

実はそれ、お袋が作ってくれたんです
妹と、揃いで」

「妹さん？」

妹さんというと……！」

少し俯いた俺の様子に、神父様がはっとしたように口を噤んだ。

「すみません……」

「いえ、全然

ほら言っただでしょ、大分落ち着いたって」

なんだかすごく悪そうに、神父様はそつと指輪を戻してくれた。

そんなに心配そうな顔、しないでほしいんだけどな。

痛ましそうな表情を隠さないこの人の前で、虚勢張ってカラ元気出すのも、結構しんどい。

他人の俺なんか、こんな心砕いてくれる人がいると思うと、弱ってる心には案外堪える。

やっぱり、聖職者は聖職者なのだ。

人の心に聴い。

人が生きる上で感じる痛みや苦しみを、よく知っている。

「はは……嘘ッス

いつまで経っても、踏ん切りなんてつきやしねえ」

「ゴアさん……」

「妹ねえ、ティネってんですけど、すげえヘンな死に方だったんすよ
自分と揃いの指輪持つてるのが目印だから、兄貴探してくれて、
遺書残してね

でも、その肝心の指輪はどこにもなくて

世話なつてたっていう大家さんにも聞いたんですけどね

やっぱりおかしいって言うんすよ

どう考えたって、ある日突然病死するような感じじゃなかった、つて」

「……」

「俺、ホントはずっと気になってるんです

何でティネは死んだのか

指輪はどこに行ったのか

参っちまいますよ、何から手をつけたらいいんだか、何にもわかんねえんすから

その上最近、おかしい夢まで見るようになってしまった」

それはみんな、あの日イルには話せなかったことだった。

『気にしないことだ』とのアドバイスを受けたということもあるし、道端に座り込んで商売やってるようなのに、こんな話ではできなかった。

こうしてジユダ様に話してみても、ようやくわかった。

俺は誰かに、この話をしたかったのだ。

俺が感じた謎や不自然な部分を誰かに伝えて、共感してほしかった。そうしてその先ある、『ある可能性：』を認めてほしかったのだ。

ティネの死の真相に関わっているかもしれない、あるものの存在を。

つまり。

「！ 魔物……？」

俺は黙ったまま、小さく呟く神父様に頷いた。

「俺も思っんです

もしかしたら、そうなんじゃないか、って」

「そんな、もしそうだとしたら……！」

「わかってます

関わるのは危険だって

けど……」

けど俺は。

やっぱり知りたい。
どうしてティネは死んだのか。
誰かに殺されたのか。

それでもそうならば、俺はこの手で、ティネの仇をとってやりたい。

「……っ」

湧き上がってくる感情に、唇を噛む。
拳を握り締める。

手のひらの中の指輪が食い込む。

一度直視してしまった本当の気持ちを見て見ぬ振りをするのは、どうしてこんなにも難しいのだろう。

「……………黒薔薇」

「……………えっ？」

「『黒薔薇』を、お探しなさい」

少しばかり血の気の引いた顔の、神父様。
顔色とは裏腹の、決然とした表情。

『黒薔薇』。

もともと薔薇は、メシア正教では神聖な花だ。

そうでなくても知名度は高いし、花びらから取れる香料は女の香水や化粧品なんかに使われている。

実は刻印の儀式で使う聖水にも、薔薇の香油が入ってたりするんだな。

紅薔薇や白薔薇はその中でも特別。

紅薔薇はメシアの血の象徴だし、白薔薇は純粹で穢れないものを表すとされているからだ。

だからシンボルやエンブレムに入れられることが多いし、教会の名前になっていることも少なくない。

実際こども、正式には『聖白薔薇教会』という名称だし。

でも『黒薔薇』なんて、今まで聞いたことがない。

「黒薔薇？

どういうことです？

何なんすかそれは？」

「私からは、これ以上のことを申し上げるわけにはいきませんが『黒薔薇』なら、あるいは妹さんのことについて、何か知っ

ているかもしれない」

「何か、って

そもそも『黒薔薇』って何なんです？

誰かのことなんですか？

それとも、まさかそいつがティネを！？」

「…今、お香を持ってきます

あなたもお忙しいでしょう、早く戻ったほうがいい」

「！ 神父様！ ちょっと待ってください！

し……！」

神父様はそう言い残すと、くるりとこちらに背を向け、礼拝堂の中に入ってしまった。

何度呼んでも、もう俺の声など聞こえていないかのように、立ち止まってさえくれなかった。

手入れの途中だったからだろう。

ジュダ様の歩みのたびに、枯れた薔薇がかさかさと鳴った。

しばらくして、小箱に入った香を持って戻ってきたジュダ様の顔はひどく青ざめていた。

俺にとっては未だ意味不明のキーワードだけど、『黒薔薇』ってのはかなり大きな鍵を握った言葉らしい。

それでも別れ際、ジュダ様は俺に『よくお休みになれますように』と気遣ってくれた。

もらった香さえあれば大丈夫だと、微妙な緊張感を感じながらも俺は返した。

この日の夜、また『悪夢の正夢』に見舞われるとも知らずに。

――！

――どうした、目が覚めた？

――……

――……あんたも、気がついたんだね

――……、……

――そうみたい
また行くかい？

――……、……！

— …… 大丈夫？ 一人で

— ……

— わかった、待ってるよ

早く戻っておいでね、怪我をしないように
あんたがいないと、私ひとりじゃ寒くてしょうがないから

— ……

— …… あ、ん …… ふふ、いい子 ……

「また、『狩り』がはじまるよ ……」

6・重なる謎

香を焚く場合は、それ専用の入れ物みたいなもんが必要になる。

こういうときに使うのが『香炉』ってやつなんだな。

悪いけど、俺ん家にはそんな雅なモンは無えわ。

仕方ねえだろ、香なんて女とか、あと趣味のヤツが嗜むモンだと思
ってたんだから。

それこそ、あとは教会とかで儀式に使うとかさ。

香なんて使ったことねえって話したとき、ジユダ様は親切にも香炉
まで俺にくれた。

高えモンでもないから、オマケだと思って、だと。

つくづくデキた人なんだよな、マジで。

「黒薔薇ねえ……」

ジユダ様の所から戻ったその夜。

寝台に寝転び、脇の机であがっている香の煙を眺めながら、俺は神
父様の言葉を思い返していた。

薔薇。

メシア正教で広く使われるシンボル。

紅薔薇ならばメシアの血の象徴。

白薔薇なら無垢と高潔な精神。
教会とは切っても切り離せない、誰もが知ってる花。

だけど、よりによって『黒』って。

何なんだよ一体。

黒薔薇を探せって、花探せってことか？ 花屋にそんなもんあったかな…。

…あ、それともどっかの場所だろうか。
マジモンで黒い薔薇ってんじゃないくて、地名で『黒薔薇』っていうか。

どこぞの教会とかならあるかもな。
通称でそう呼ばれてるとか。

……あるいはアレか、合言葉か？
『ひらけ〜ゴマ！』とか、『ひらけ〜ポン。ツキ！』みたいな？

「……ダメ、全然わかんね」

『黒薔薇』を探すにしても、まず当たりをつけないとどうにもならない。

ありそうで無かった言葉の意味するところを想像しているうちに、
だんだん瞼が重くなってきた。

考え事をしながら睡魔に襲われてく感覚を、またありがたく思えるようになったのはジユダ様のおかげだ。

「…ま、いいわ 明日にしょ」

おぼつかなくなった瞬きもやめて、俺は毛布をかぶった。

―あ？？？

目を閉じた次の瞬間には、俺は夜中の街にいた。
薄茶色の街灯で、申し訳程度に照らされた大通り。

ここは……あ、ギョーラの店の前じゃねえか。

―何で、こんなところに……

そうだよ。

何でこんなところにいんだ、俺。

さつきベッドで横になったはずだろ。

自分でも訳が分からずにいる間に、俺の身体はギョーラの店の裏手の窓に向かっていた。

明るいいええな視界に映る俺の身体は、外套に覆われている。またもや足取りは重く、ふらふらとおぼつかない。

店の壁についた左手は、大きくて骨ばっていて、長い長い爪を持っていた。

そうしてやっぱり、人差し指にはティネの指輪。

――……

いやゝな予感、そのイチ。

もしかして、またあのへんな夢か。

いやゝな予感、その二。

しかも何だよ、今日はいつもと状況違うじゃねえか。

――……カンベンしろよ……

俺の意識なんて置き去りにして、重い身体は鋭い爪をガラスに突き立て、鍵を開けるなりすると室内に侵入。

降り立った場所は居住スペースだったらしく、室内は何とも生活感に溢れている。

不思議なことに、暗闇でも俺の目はものが良く見えるらしい。

入った先はキッチンらしいのだが、家主の性質は店だけでなく住まいにも反映されるみたいだ。

水回りには汚れた食器がうず高く積みあがり、食卓の脚にはわたばこりがそよいでいる。

ちゃっちゃと洗えつつんだよ、汚れモンなんてよ。

夢だつてのに思わずそんな感想を「浮かべた」のは、背筋にビリビリ来る不快な心持ちを誤魔化すため。

これから絶対に起こるに違いないのだ、クソみたいに寝覚めの悪い出来事が。

その確信から目を背けたいなら、こんなマヌケなことでも考えてなくちゃ。

視界に入るダイニングやリビングも、雰囲気はキッチンと同様。

小汚くて、雑然としていて埃っぽくて、おまけにそこはかとなく年寄り臭え。

勝手に入り込んだギョーラの家の中を、ぶしつけにも色々見回しながら歩いている『俺』。

察するに、それとなく何かを探しているみたいだ。

どうかするとそのへんの戸棚、勝手に開けていきそうな雰囲気だもんな。

… ちょっと待て。

大体窓から勝手に侵入するあたりからアヤしいだろ。

自分で自分にツツコんだ頃、醜い俺の手は最後に残った、寝室と思しき部屋のドアに手をかけた。
結局、お目当てのものは見つけれなかったらしい。

――…止まんな

ガシャリ、という重い金属の音と共に、誰かが俺を脅した。
後頭部に突きつけられているのは何か固いもの。
声からするに、多分ギョーラだ。

どこに隠れてたんだよこのオニババ。

――…

――動くんじゃないよ

こいつあさるお方から手に入れた、霊験あらたかなシロモノさ
アンタの頭ひとつ吹き飛ばすなんざ軽いよ

――…威勢ノイイ年寄りダナ

相も変わらずしわがれた『俺』の声。
けれど前と違って、いきなり襲いかかりそうな気配はない。

頭を狙われ、主導権を握られているんだから当然だろって感じだろうけど、どうもそういう危機感に因るところではなさそうで。

何なんだ、一体。

―お黙りこのバケモノ

窓から忍び込むなんて、あんたこそナメた真似してくれるじゃないか

―……

―…チツ、紛らわしい真似しないどくれ
モノはこつちさ、来な

こつちが危害を加える気がないとわかつたのだろう。

頭に当てられていたものが外され、俺は後ろを振り向いた。

曲がった背中に長い白髪、不ツ細工なシワシワ顔のババアが、こちらを忌々しげに睨んでいた。

その手に握っていたのは……ゲツ、魔弾^{マダン}かよ。

魔弾は魔物向けに改造した銃のことだ。

大きく聖護符が彫刻されているから、見ればすぐに分かる。

しかもババアの持つてるやつ、ベースが散弾銃でやんの。

いくら護身用だったって、そこまでのモンが必要かね。

ギョーラに通されたのは店の方。

乱雑に置かれた物をかき分け、出てきた壁には小さな取っ手が埋め

込まれている。

どうもそこはちょっとした物置になっていたらしい。
取っ手を持ち上げ引つ張ると、中には片手で持てるくらいの箱が入っていた。

恭しい手つきでそれを取り出すギョーラに、『俺』が少々気色ばむ。

―ヘッ、可笑しいもんだね

魔物なんかがこんなもの欲しがるなんて

―可笑シイノ八人間ダロウ

コンナモノヲ欲シガツテ同族ヲモ殺スノダカラ

―人の世界のことがか分かつてたまるもんかい

金ってな、この世の全てさ

……アンタだって、だからアタシに取引持ち掛けてきたんだろ？
え？

手のひらで銀貨をもてあそぶ『俺』を、心底悪そうな顔でギョーラが晒った。

その目はぎらぎら光っていて、この大口の取引を早く済ませ、そこにある大金を我が物にしたいとてたまらないというのが見え見え。

―さ、アンタも用意してきたんだろ

早くこっちにお寄越し

―……ヒトツ聞キタイコトガアル

―質問は後にしとくれ、今は取引が先さ

―ソノ魔弾、ドコデ手二入レタ？

―……クツ、フ、アハハハハ！

魔物のアンタに素直に言うと思うのかい？

魔弾を片手に呵呵大笑するギョーラ。

バカにされているというのに、奇妙に余裕のある『俺』。

―ほら早く金をお寄越しつたら

こんなババの家にいつまでも居座ったって、楽しいことなんかないよ

不敵で不穏な様子を察知したのか、魔弾を構えてギョーラが言う。
魔弾があるという安心感なのか、バケモノ相手だというのにギョーラに恐れる様子はない。

―……『ユメユメ、オ忘レニナリマセヌヨウ

魔ナルモノハオソロシク狡猾デス

人ナドヨリモ、余程賢イ』

しわがれた声が、どこか嘲りをこめて紡いだ台詞に、ギョーラの顔

色が変わった。

銃に刻まれた聖護符が、空気に溶けるように消えてなくなった。

― 試し撃ちハモウシタノカ？

―！ あ、が…っ！？

右手は貨幣を手放し、熱くぬかるんだ血肉を掴んだ。

「！！！！」

最初に見えたのは天井。
もう大分陽が高い。

手のひらを見る。
血はついていない。
辺りを見回す。
瞬きを繰り返す。

向かって左の壁の奥にドア、サイドランプの傍には香炉。
外からは傍の飯屋の匂いがしてきて、名物のおかみさんが街行く人
にかける声が聞こえる。

問題ない、ここあ俺んちだ。
ギョーラの店じゃない。
大丈夫、俺ちゃんと人間。

― そうだ、ギョーラはどうなった！？

勢いもそのままに、家を飛び出した。

― なに、強盗？

― 夜中に襲われたらしいわよ……

― いやだ、怖いわあ…

― アレでしょ？

あそこのおばあさん、危ない商売してたんでしょ？

― 危ないってどんな？

― どんなって、ほら、質屋だしさ…

―あたし知ってる！

困ってる人の持ってきた貴重品、すっごい安値で買い叩いてみたいよ

―そういえば私も

期限前だったのに、大事な首飾り売り払われたって、知り合いが泣いてたわ

―商売がらみで、誰かの恨み買っちゃったんじゃない？

―いやあねえ…

―ほんとにねえ……

「……」

昨日の夜、夢で俺がいた場所。

大通りに面した、小汚いギョーラの店。

昼前のそこには黒山の人だかりができ、耳を澄まさずとも噂話が聞こえてくる。

波間を縫うように進んだ先では、揃いの服装の奴らが店の中を出たり入ったり。

どうやら警官たちが店内やその周辺、居住スペースの中を調べまわっているようだった。

考えるより先に、脚が動いた。

回りこむのは裏手の窓。

傍まで行ってよく見ようとしたとき、後ろから来た警官に止められた。

「！ ちょっと！ 何してるの！！」

「！ あ、えつと……」

「だめだよここは
まだ調べてる最中なんだから」

「すみません……」

「まったく、困るよ

こっちは見せもんじゃないんだから
ほら行つて！」

「や、あのちよつと……！！」

この人だかりに、相当苛ついていたのだろう。

よくよく見る間もなく、その警官に背中を押されて俺はその場を追い返された。

強引さと剣幕に負けてしまったけれど、その前に目にした光景は焼きついている。

遠目に見えた窓はやっぱり夢に見たとおり、鍵のところのガラスだ

けが丸く切り取られていた。

―ギョーラ……

間に合わなかったのだ、俺は。

こみあげてくるものに、思わず手で口を覆った。
いけ好かないババアだったとは言え、見知ったヤツが死ぬってのは
いい気はしない。

―なんなんだいあんたたち！

そうだった、いつもそういうモノ言いだった。
商売やってるってのに無愛想で。

客の足元見では、ぼったくってばかりで。

「邪魔だよそんなとこに！

買っ気がないならとっとと消えな！！」

―……あん??

「誰が死んだってんだい、ふっざけんじゃないよ!

このギョーラ様がコソドロなんぞに殺られてたまるかってんだ!」

怒声のした方向には、箒振り回して野次馬たちを蹴散らす見知った人影。

驚きのままに近づけば、いつもに増して威勢三倍増しのごうつくババ。

額の右側には絆創膏を貼っていて、ちよつとばかり血が滲んでいる。

「ババ…おいギョーラ!」

「! なんだいあんたまで!

あんたもアタシがくたばったと思って、見物に来たんだろう!」

「ばつきやる人が死ぬの喜ぶようになったら人間終いだろぅが!

無事だったのかお前!」

駆け寄って肩でも抱かんばかりの俺を、胡散臭そうに見返してくるギョーラ。

そりゃそうだ。

あんなんじゃないけりや俺だって、お前が生きてんのこんなに喜びやしねえ。

「ハア……つたく、アタシも落ちぶれたもんさ
あんなヤツに騙されるなんて」

「…騙された？」

「報酬ははずむ、なんなら半分前金で払うって言っからさあ
ついつい乗っちゃったよ
忘れてたね、オイシイ話にやウラがあるってさ」

「なあ、一体何があつたんだ？
てか何でオマエ助かった？」

「ああ？」

「昨日の夜だよ！
取引相手に殺されそうになったんだろ？
なのに、何で助かったんだよ！」

「！…アンタ、何で知ってる？」

「あ、や、そりゃ……ほら、そこいらの奴らだよ
それより教えるって、どうやって助かった？」

「な、どうやってって……」

「ギョーラ・アミ・タルジャさんですね
お話聞かせていただきたいんで、ちょっと来てもらえますか」

次の一言にギョーラが口を開けた瞬間、背後からやってきた警官が声をかけてきた。

丁寧な言葉に反して、寄越してくるのはぎらついた視線。ソイツの手には、夢で見たあの小箱が握られている。

目の前で開けられたそれは二重底になっていて、小さなプレミアムッド型の乾燥された実が詰まっていた。

カジャの実だ。

カジャはここいらには多く出回っている麻薬の一種。

中毒症状・禁断症状が強いため規制の対象になっている。

「カジャの実は売買禁止のはずだし
しかも結構な量ときてる

…誰に売るつもりだったんです？」

「チッ……ヤラれた…」

「か…お前カジャなんか手え出したのか！」

「出してない！」

カジャなんか知らないよ！

アタシが頼まれたのはその箱だけさ！」

「見ての通り、この箱は底が二重になっている
知らなかったとは言わせませんよ」

「はあ……つたく、ツイてないね」

「ご同行、いただけますね」

「なあ、ちょっとだけ待ってもらえねえか
少しだけ、コイツに聞いときたいことがあるんすよ」

「それを聞くのは、我々の仕事なんですがね」

「……」

「正直迷惑なんですすよね、興味本位で我々の真似事されると
邪魔以外のなにものでもない」

「こんにやろ、でけえ口叩きやがる。」

「国家権力だか何だか知らねえが、偉そうに威張りくさつてよ。」

「詳しい話は署でお願いします
ちよつとゆっくりしましょうよ、昨日から眠ってないでしょう？
お茶くらいは出しますから、ね？」

「慇懃なほどに丁寧な口調で、その警官はギョーラに笑った。
とうとう獲物を追い詰めた、腹を空かせた捕食者の目をして。」

「…仕方ない、今日は休みにしないとね」

「ギョーラ……」

「悪いけどアンタ、話はまたの機会にしとくれ」

奴さん、どうしてもアンタより先に、アタシとランデブーしたいみたいだから」

「……」

「そうだ、これアンタに渡しとくよ」

「！」

手渡されたものに思わず顔を上げた俺に、疲れた表情でギョーラが付け加える。

「昨日、お客が残してったんだ」

「これ……」

「やられそうになったとき、飛び込みでもう一人来たんだ助かったのはそれでさ
これがどっちの持ち物かは知らない
騒ぎの後、その場に残ってたんだ」

「でも、なんで俺に」

「さあね、年寄りあ気まぐれなんだ」

「……」

「もう行くよ、警察のあんちゃんが青筋立てて待ってるからね」

「アンタもせいぜい気をつけな、何探ってるか知らないけど」

曲がった腰に手を当て、思ったよりもしゃんとした足取りでギョーラは店を出て行った。

その後姿を見送る俺の手に残されたのは、たった一つだけの大きなヒント。

「どうなってるんだ…？」

去り際に渡されたものは金属でできた飛び道具。

ここいらではめったに見かけない、けれど俺にとってはちよつとばかり馴染みのある、異国情緒に満ちた代物。

ギョーラが俺に寄越したそれは、俺が教会から彫刻と刻印を依頼されたものと、全く同じクナイだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3388i/>

鍛冶屋と捨て子と占い師～黒薔薇神父退魔戦記 序～

2010年10月10日14時10分発行